ヴァン・グーリックの傅增湘絶句への次韻詩
——印人松丸東魚との交遊のなかで——

稲畑耕一郎

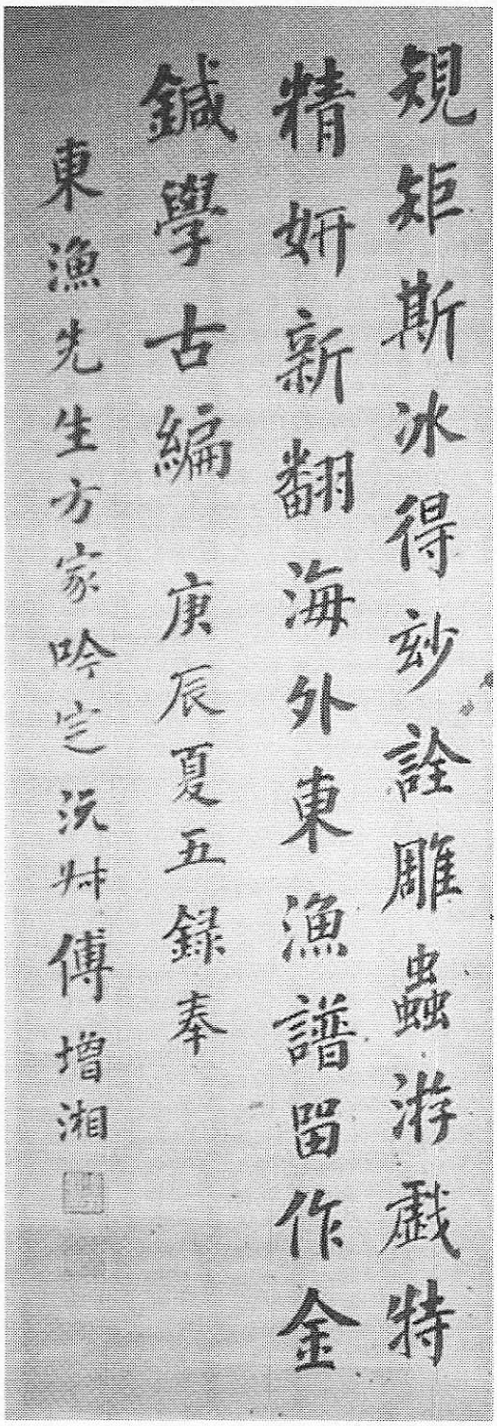
筆者は、以前、「傅增湘的遺稿——致松丸東魚的書信與絶句」という小文を書いて、民國の古文獻學者であり、大藏書家であった傅增湘（1872-1948）に日本の印人松丸東魚（1901-1976）に送った書翰と絶句のあることを紹介した[1)]。その詩は次のようなものである。［圖Ⅰ］

規矩斯冰得妙詮　　斯冰を規矩として妙詮を得たり
雕蟲游戯特精妍　　雕蟲の游戯　特(ひと)り精妍
新翻海外東漁譜　　新たに翻す　海外東漁の譜
留作金鍼學古編　　留め作す　金鍼　學古編
　庚辰夏五、錄奉東漁先生方家吟定。沅叔傅增湘。
　庚辰の夏五、錄して東漁先生方家の吟定に奉ず。沅叔傅增湘。

この詩は、1940年の初夏、東魚が二度目の中國旅行に出たおり、北京（北平）で傅增湘から贈られたものである。この時、東魚は前年の春に作った『東魚印存』第一集の原鈐本を携えて傅增湘を訪ねた。それを目にした傅增湘が東魚に書翰をもって雅印の作製を依頼するともに、この詩を贈った[2)]。そのことの詳細は前文に記したので、ここには省略する。

ところが、その文を書いた後、この傅增湘の絶句にヴァン・グーリック（Robert Hans van Gulik。中國名は高羅佩）が次韻した作品のあることを知った。日中兩國間のみならず、一顆の印を介してヨーロッパの學者を交えての交遊があったことになる。この「文を以て友を會す」交遊の中に、今日の私たちの中國學が過去に置き忘れてきた何かがあるように思われるので、ここに紹介しておくことにする。

オランダの外交官であったグーリックの名は、まず何よりも『狄公案』シリーズの探偵小説を通して、今も記憶に留められているであろう。また、すで


規矩斯冰得玅詮雕蟲游戲特
精妍新翻海外東漁譜留作金
鍼學古編　庚辰夏五録奉
東漁先生方家吟定　沅舮傅增湘

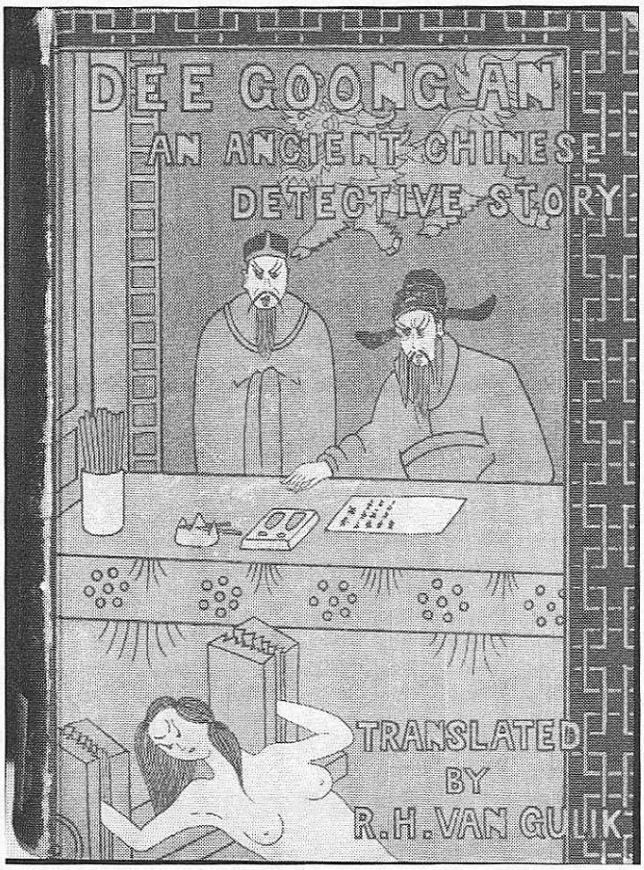
圖Ⅰ　傅增湘の松丸東魚への絶句
（松丸道雄氏藏、軸裝）

に日中において翻譯のある“*Sexual life in ancient China: a preliminary survey of Chinese sex and society from ca. 1500 B. C. till 1644 A. D.*”の著者として知る人もあろう[3]。さらには、中國の傳統音樂に關心のある人であれば、“*The Lore of the Chinese Lute: an Essay in Ch'in ideology*”などの著作を通して、中國古琴の先驅的研究者として評價する人もあるだろう。むしろ、本務であった駐日オランダ王國特命全權大使としての立場は忘れられているのではないかと思うほどである。

しかし、そのいずれにせよ、彼が作った漢詩や書畫、篆刻などの作品については、實作に觸れる機會の少ないこともあって、ほとんど知られていない[4]。こうした實作品は、探偵小說や研究論文とは別に、グーリックの中國文化に對する理解のあり方を知るうえで大變重要なものであるばかりではなく、今日の私たちが中國學のあり方、少なくとも中國古典學のあり方を考えるにあたっても貴重な示唆を含んでいるのではないかと私は考えている。

ヴァン・グーリックは、1935年にオランダのウトレヒト大學で中國と日本の馬頭觀音に關する研究によって博士號を取得した後、オランダの外務省に入り、ほどなくして最初の赴任地である東京に駐日公使館の書記官として來日した。1935年、グーリック、25歳のときのことである。それから1941年に歸任するまでの數年の間に、東京で“*The Lore of the Chinese Lute*”“*Hsi K'ang and his Poetical Essay on the Lute*”などの古琴に關する著作を世に問うている[5]。從って、グーリックはまず中國の傳統文化

に強い關心をもつ外國人として認識された。もとより日本語にも、中國語にも長じていた。



圖Ⅱ　英語版“*Dee Goong An*”の表紙（グーリック畫）

グーリックが松丸東魚と知り合ったのも、この第一回の來日の時期である。東魚の記憶によると、1939年のことではなかったかという[6]。東魚は、印人仲間からオランダ公使館に勤める若い書記官に東洋の書畫藝術に並々ならぬ才學を示すグーリックという名の青年がいることを耳にしていたが、ある時、東京京橋の骨董商「光畑」の店内で、その人と思われる人物がいるのを見かけ、名乗り出て刺を通じ、たちまちのうちに意氣投合した。東魚39歳、グーリック28歳のときのことである。

それ以後、兩者は書畫篆刻など好むところが同じであったことから、親密な交遊を續けることになる。1940年の末に東魚が出した『東魚印存』の「第二集」には「高羅佩印」と、グーリックの齋名であった「中和琴室」の印影を認めることができる[7]。グーリックは東魚が刻したこの「高羅佩印」の極小印（7ミリ角）を長く愛用したようで、早稲田大學圖書館に所藏されるグーリック本人から寄贈された『狄公案』シリーズの翻譯の第一作“*Dee Goong An;An Ancient Chinese Detective Story*”に［圖Ⅱ］、直筆の獻辭、サインとともに、東魚が刻したこの小印が捺されている。［圖Ⅲ］

この英文の『狄公案』は、1949年に東京で凸版印刷から刊行されたものである[8]。この年、グーリックはオランダの軍事使節團の政治顧問として日本に滯在していた二度目の時期にあたる。この時にも、グーリックと東魚の間には交流があり[9]、ここに紹介するグーリックの絶句はその時に傅增湘から東魚に送られた詩を見せられて作ったものである。次に擧げるのが、グーリックが傅

增湘の詩に次韻し、箋紙に自ら毛筆で書いたものである。己丑の年、1949年の歳暮の作である。［圖Ⅳ］

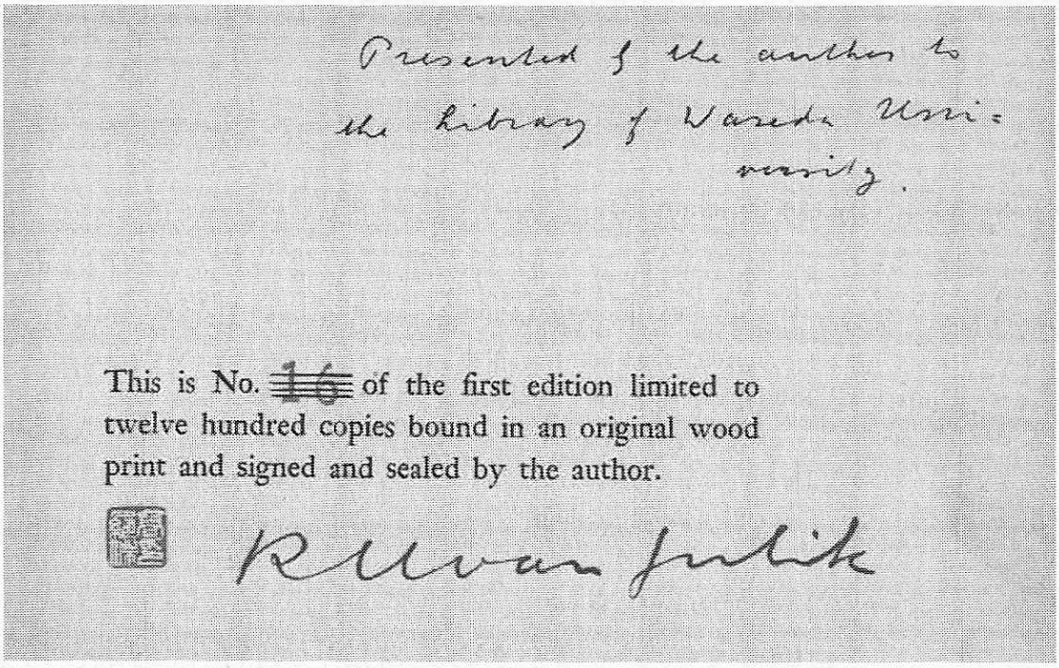
篆雕雅緻奈何詮　　篆雕の雅緻は　奈何にして詮(と)かん
妙手虛心得熟研　　妙手　虛心にして　熟研するを得ん
百譜繽紜休瀏覽　　百譜　繽紜たるも　瀏覽するを休めよ
仰賢亭灋在斯編　　仰賢亭の灋(ほふ)は　斯の編に在り

己丑歳暮、次傅增祥（湘）先生韻、以題東魚先生印譜。荷蘭高羅佩拜稿。

己丑歳暮，傅增祥（湘）先生の韻に次し、以て東魚先生の印譜に題す。荷蘭の高羅佩、稿を拜す。

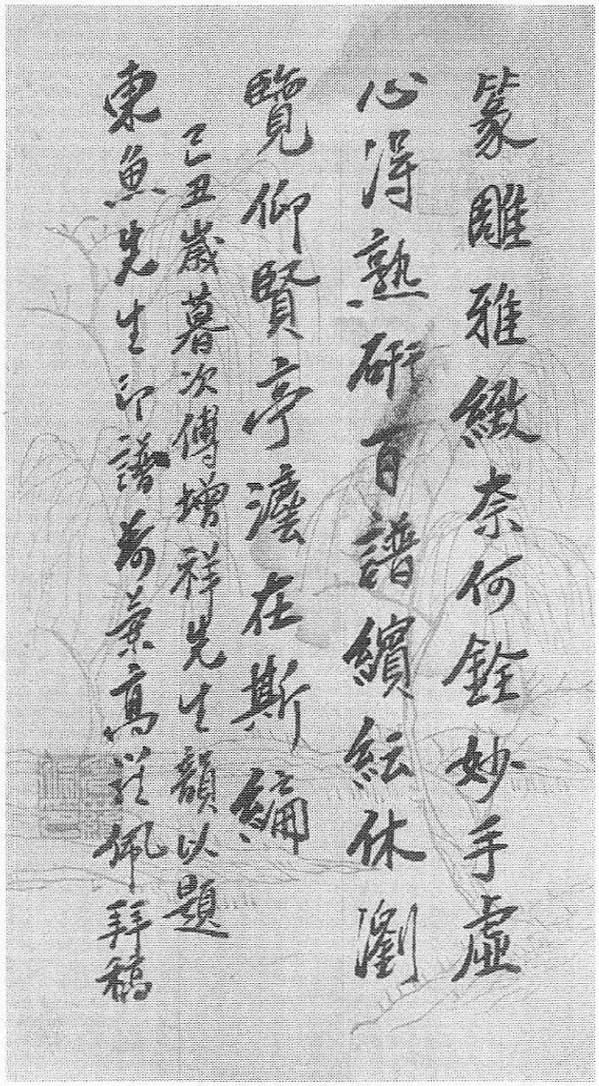
詩に言う「仰賢亭」は、杭州の西泠印社の創始者の一人であった吳石潛が清代揚州八怪の羅兩峰が描いた丁敬の畫像碑を印社内に置いて祀ったことに始まるが、のちには篆刻の先達を記念する建物となった。その西泠印社の先達が追い求めた印の世界が東魚の印譜の中に體現されていると賞贊したのである。グーリックは傅增湘から東魚に贈られた題詩を見せられて、この詩を作ったものと思われる。グーリックもまた印を善くする人であった。

グーリックがこの次韻詩を作った年の秋10月、傅增湘は78歳の生涯を北京で終えていた。グーリックもまた傅增湘の名と學識はよく知っていたであろ



圖Ⅲ　圖Ⅱの表紙見返しに記されたグーリックの獻辭、限定番號、サインと東魚刻「高羅佩印」　（早稲田大學圖書館藏）

うし、この間には北京に行ったこともあり、また重慶に移っていたオランダ大使館に一等書記官として勤務したこともあるので、生前に面識があった可能性はなくはない。この時、二人が傅增湘についてどのようなことを話題にしたのかは知る由もないが、東魚の方寸の世界を介して、唱和詩が生まれ、日中歐の同好の士の思いが一つになった瞬間であった。


篆雕雅緻奈何銓妙手虛
心得熟研百譜續紘休劉
覽仰賢亭濃在斯編
己丑歲暮次傅增祥先生韻以題
東魚先生印譜為蕉高從枫拜稿

圖Ⅳ　グーリック手書次韻詩（松丸道雄氏藏）

グーリックが生涯においてどれほどの數の漢詩を作り、現在どれほどのものが殘されているのか定かではない。しかし、この詩と書跡を見るだけでも、グーリックの中國の傳統文化に對する造詣と修練が端倪すべからざるものであったことは十分に見て取れよう。グーリックが外交官でありながら、このように琴棊書畫や詩文の世界を志向し、また實踐したのは、それが中國において脈々と受け繼がれてきた士大夫としての學問の傳統であると考えていたからである。そのことがよく理解されているはずの東アジアの學者によってではなく、文化風土の異なる泰西の人によって實踐された點により多くの敬意が拂われるべきではないかと思う。

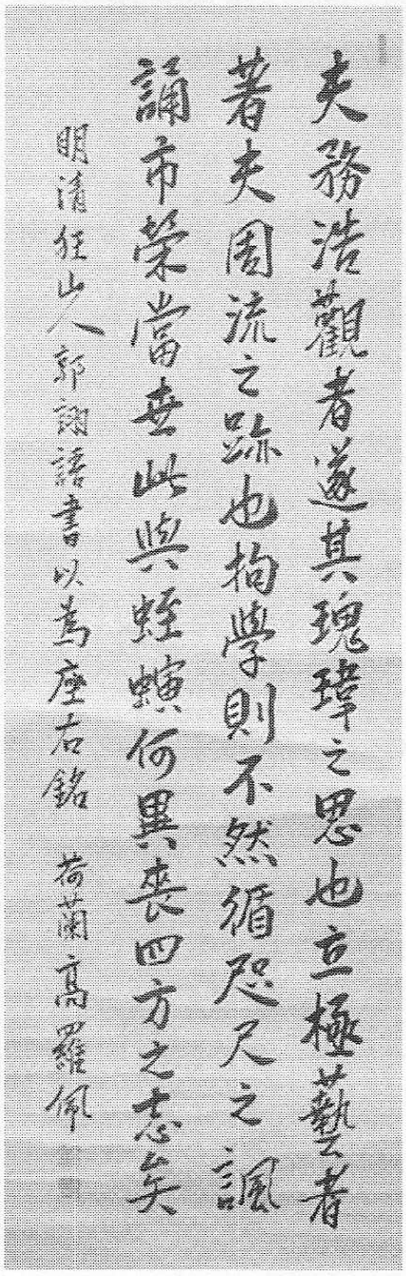
グーリックはこうしたことを單なる消閑の具とはしていなかった。むしろこうした實踐を通して“學藝”の世界に身を投じることを東洋學者のあるべき姿だと明確に意識していた。そのことは、座右の銘として次のような文を書き殘していることからからも窺うことができる。[圖Ⅴ]

夫務浩觀者、遂其瑰瑋之思也。立極藝者、著夫周流之跡也。拘學則不然。循咫尺之諷誦、市榮當世。此與蛭螾何異、喪四方之志矣。

明清狂山人郭詡語、書以爲座右銘。 荷蘭 高羅佩。(印 吟月庵 高羅佩印)

夫れ浩觀を務めんとする者は、其の瑰瑋の思ひを遂ぐるなり。極藝を立てんとする者は、夫の周流の跡を著すなり。學に拘めば則ち然らず。咫尺の諷誦に循って、榮を當世に市(あきな)ふのみ。此れ蛭螾と何ぞ異ならん、四方の志を喪ふなり。

明の清狂山人郭詡の語、書して以て座右の銘と爲す。 荷蘭の高羅佩。



圖V グーリック手書座右銘
(早稻田大學圖書館藏、軸裝)

この文は、明の畫人郭詡(1456-1532)の文章である。郭詡は各地を遊歷して畫業の研鑽を重ね、山水や人物に優れた作品を殘した。江西泰和の人にして、字は仁弘、清狂道人・清狂逸叟などと號した[10]。「四方之志」とは『左傳』僖公二十三年の條では、天下を平定するという意で使われているが、郭詡がここで言うのはそうした俗なことではなく、高遠な志をもつて生涯を送ること、すなわち「志在四方」と同じような意味である。

この文を「座右銘」として書き殘したグーリックは、外交官として、またその間に兵役もあって、確かに世界各地に足を運んだが、「四方之志」というのは、そうしたことを言うのではなく、一つの狹い領域を墨守して、自己の見識を養うのではなく、廣い視野と深い思索、それに加えて實踐によって、かつての文人たちが志したような仕事を殘そうとしたことである。琴棊書畫のいずれの研究においても、いわゆる書物だけでの研究というに留まらず、自ら實踐し體驗することを通して、それらが生まれてきた文化土壤を深く理解しようとしたのである。それはグーリック自身の愉

しみでもあったに違いないが、そうした境地に達しなければ眞の東洋學者ではないという明確な意識があったからに他ならない。この文を座右の銘として書き殘したことからは、グーリックのそうした思いが讀み取れる。

小說の執筆であれ、性文化の研究であれ、琴棊書畫の世界に沒頭するのであれ、彼の著作はいずれもそうしたことから生まれたものであった。非凡で稀有な東洋學者であったといえよう。周知の通り、東洋學の分野では、この一世紀に限っても、ヨーロッパにおいて數多くの優れた學者が生まれ、その成果に今なお我々は多大な學益に與っている。ヴァン・グーリックもまたその一人として銘記されるべき人である。

そうであるにもかかわらず、日本において、グーリックはおおむね翻案小說の作者か好事家としかの理解に留まっているようである。それは、グーリックに對する評價を惜しむだけでなく、私たちの學問世界にとっても惜しむべきことであろう。ここに私たちの今日の東洋學が學問としては確かに日々前進しているのであろうけれど、過去に置き忘れてきたものがあるように思うからである[11)]。

注

1)『中國典籍與文化』2009年第2期（全國高等院校古籍整理研究工作委員會、2009年6月）。「斯冰」は、篆書の名手として知られる秦の李斯と唐の李陽冰の二人。清の趙翼の「李靜庵の印譜に題す」（『甌北詩鈔』第一册）という五言古詩に「直ちに斯冰の手を將ちて、妙みに漢唐の製に仿ふ」とある。「規矩」は、模倣すること。「東漁譜」は、この時、携えていった『東魚印存』の第一集（一帙二卷）を指す。「金鍼」は、天の織女が地上の娘に與えた刺繡が上達するという金の針のことであるが、後にはこれをもって秀でた技藝を言うようになった。「學古編」は元の吾丘衍が書いた篆刻の理論書であるので、東魚の作品にはそこに說かれているような優れた方寸の世界が示されていると讃えたのである。

2) 傅增湘の書翰は次の通り。「東漁先生左右。昨承惠臨、蒙賜印譜一函。披觀竟日、韻格超渾、筆力古勁、漢白尤爲樸厚、佩服無似。特撰小詩一章、錄以奉貽、敬希哂納。別呈石章二對、求公奏刀。一爲弟鈐書所用、其晉生一對、乃大兒奉求者。兒子善刻竹、他日令其扇骨、以奉敎也。弟本當專訪、幷送行旌、乃前日忽患病、已臥三日、今甫强起、不能遠出、故作書亦殊孱弱不支也。手此。敬請文祺。傅增湘拜啓。六月四日。坿上舊牋一幅、奉求平尾先生法書。前日曾面懇者。敬祈轉致爲幸。」

（訓讀）「東漁先生左右。昨は惠臨を承けたまはり、印譜一函を賜はることを蒙る。

披觀すること竟日、韻格は超渾、筆力は古勁、漢白尤も樸厚爲り、佩服似る無し。特に小詩一章を撰し、錄して以て奉貽し、敬して哂納を希ふ。別に石章二對を呈し、公に刀を奏めんことを求む。一は弟の鈐書用ふる所と爲し、其の晉生一對は、乃ち大兒の奉じ求むる者なり。兒子は刻竹を善くす。他日其をして扇骨を以て、敎を奉ぜしめん。弟本と當に專訪し、幷せて行旌を送るべきも、乃ち前日忽ち病を患ひ、已に臥すること三日、今甫めて强ひて起くるも、遠く出づる能はず。故に書を作すも、亦た殊に孱弱にして支へざるなり。此に手づからして、敬して文祺を請ふ。傅增湘拜し啓す。六月四日。坿して舊牋一幅を上り、奉じて平尾先生の法書を求む。前日曾て面して懇むる者なり。敬して轉じ致されんことを祈ひ幸と爲さん。」

なお、『東魚印存』二集には、この時の依賴を受けて作った「沅叔心賞」（傅增湘）と嫡子の傅忠模（晉生）の「晉生心賞」、「佩德齋」の印影が見える。同書には「羅叔言」（羅振玉）、「羅福成印」（羅福成）、「黃質之印」（黃賓虹）の印影も殘されている。

3）日本語譯は『古代中國の性生活――先史から明代まで』（松平いさ子譯、せりか書房、1988年1月）、中國語譯は『中國古代房內考――中國古代的社會』（李零・郭曉惠ほか譯、上海人民出版社內部發行、1990年11月）。

4）これまでに筆者が目睹できたものは、陳之邁「荷蘭高羅佩（三）」（『傳記文學』第十四卷第一期、1969年1月、傳記文學雜誌社）に引かれる香港の琴友徐文鏡に贈った次の律詩一首である。「漫逐浮雲到此鄉、古人邂逅得傳觴。巴蜀舊事君應記、潭水深情我未忘。宦績敢云希陸賈、游踪聊喜繼玄奘。匆匆聚首匆匆別、更泛滄浪萬里長」。

5）グーリックの經歷や著作は、早稻田大學圖書館所藏の“*A Personal history of Dr. Robert Hans van Gulik* 1910-1967”による。それによれば、グーリックの日本滯在は、第一回が1935年から1941年まで、駐日オランダ大使館書記官として、第二回が1948年から1951年まで、オランダ軍事使節團政治顧問として、第三回が1965年から1967年まで、駐日オランダ全權大使としてであった。［附錄1］參照。

6）松丸東魚「グーリックさんを憶う」（『東魚文集（松丸東魚遺稿）』1977年6月、私家版）。

7）東魚がグーリックのために作った印は少なくない。『東魚印存』第二集に「高羅佩印」「中和琴室」の極小印が收められている他にも、『松丸東魚作品集』（松丸道雄編、谷川商事刊、1978年）には「芝臺」（1941年刻）、「高羅佩印」、「蘭國高羅佩印」、「荷蘭高羅佩印」、「綺琴」、「水世芳印」（夫人の印、以上は1949年刻）、「高羅佩藏」、「青雲不如白雲高」、「公餘樂琴書」などが見える。

8）該書は、1949年に日本の凸版印刷から出版された。原書は、清の佚名『武則天四大奇案』。翻譯は二册本で、“The Case of the Double Murder at Dawn”“The Case of the Strange Corpse”“The Case of the Poisoned Bride”の三話が收められている。表紙の繪はグーリックが原圖を描き、それを九枚の木版に彫って印刷された、いわゆる套版印刷である。グーリックから早稻田大學圖書館への寄贈は、1950年1月27日。

9）この時には、グーリックは東魚を時に自宅に招くことがあり、グーリック自筆の

日本語の招請狀（松丸道雄氏所藏）からは、文求堂の田中慶太郎や、林謙三、長澤規矩也などが同席していたこともあったようである。

10）郭詡のこの文は、友人の畫人である劉節の書いた「明清狂郭君墓誌銘」（黄宗羲『明文海』卷四百六十六所收）に見える。また、焦竑『國朝獻徵錄』卷百十五藝苑の陳昌積「郭清狂詡傳」や過庭訓『本朝分省人物考』卷六十八に收められている傳記の中にも引かれている。

11）たとえば、高田時雄編著『東洋學の系譜［歐米篇］』（大修館書店、1996年12月）には、錚錚たる歐米の學者二十四人が取り上げられ、その生涯が紹介され、事績が顯彰されているにもかわらず、グーリックの名はない。この事情の背景には、グーリックが外交官を本務としたことから、その學統をアカデミズムの方面で繼承するものがなかったこと、また日本における東洋學のあり方が半世紀の間にかなり變化し、こうした學風を十分に評價できなくなってきたことなどが關わっているのであろう。いずれにせよ、「少一人」の憾みなしとしない。

附錄についての說明

［附錄1］ヴァン・グーリック自編略年譜、および［附錄2］ヴァン・グーリック自編著作目錄は、いずれも早稲田大學圖書館に所藏される“*A personal history of Dr.Robert Hans van Gulik*（1919-1967）”と題されたタイプライターで打ち出された文書（A4版、24葉）の一部を整理して掲げるものである。この文書は、1967年9月24日にグーリックが享年五十七で逝去したあと、翌1968年4月8日にグーリックの次男のPieter Gulik氏によって早稲田大學圖書館に寄贈されたものである。記述から判斷するに、グーリックが病氣治療のために日本を離れる前、1966年12月にグーリックによって東京で書き記るされたものと思われる。グーリックの經歷や著作について書かれた文章がないわけではないが、他に比して最も確かな資料となしうると考えられるので、ここに掲載することとした。

なお、この文書には、ここに示した略歷と著作目錄（並びに梗概）のほか、勳章や所屬學會などにあたるDecorations, Memberships の項もあるが、それらは暫時、略に從った。また、著作目錄のうち、後半部（Ⅶ. Ⅷ. Ⅸ. Ⅹ. Ⅺ.）には著者による『狄公案』シリーズの詳細な書目や說明などがついており、たいへん興味深いものであるが、これも紙幅の都合で割愛した。

著作目錄に付したギリシア數字は、いずれも整理の便を考えて稲畑がつけたもので、原文にはないものである。イタリック體の部分は、原文では下線が引かれているところである。

［附錄1］ヴァン・グーリック自編略年譜

Born:	At Zutphen – The Netherlands the 9th of August, 1910.
Education:	Elementary school– Surabaja and Batavia (Former Netherlands East Indies) (Indonesia)

1923-1929 Grammar-school at Nijmegen, The Netherlands

Scholastic Education:

1929-1933 State University at Leyden, The Neth.
Law and Polity (B. L.)
Chinese and Japanese Language and Literature (B. A.)

1934 State University at Utrecht, The Neth.
Chinese and Japanese Language and Literature.
Doctoral Ex. (cum laude)

1935 State University of Utrecht, The Neth.
Doctorate Literature and Philosophy (D. Litt.) (cum laude).

Career:

1935-1941 Secretary of Embassy at the Royal Netherlands Legation at Tokyo.

1942 War-duty in East Africa, Egypt and Allied Headquarters at New Delhi.

1943-1946 First Secretary of Embassy, Royal Netherlands Embassy at Chungking (China).

1946-1947 Term of duty at the Ministry of Foreign Affaire at the Hague, The Netherlands (Political Affaires Section)

1947-1948 Counsellor Royal Netherlands Embassy Washington DC. USA

1948-1951 Political Adviser to the Netherlands Military Mission at Tokyo.

1952-1953 Counsellor Royal Netherlands Embassy, New Delhi,India.

1954-1956 Term of duty at Ministry of F. A., The Hague, The Netherlands.
Director Middle Eastern and African Affairs Bureau.

1956-1959 Envoy Extraordinary and Plenipotentiary at Beyrouth, concurrently in Syria.

1959 Envoy Extraordinary and Plenipotentiary at Kuala Lumpur.

1960-1962 Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary at Kuala Lumpur.

1963-1965 Ministry of F. A. The Hague. The Neth. Director Reseach and Documentation Bureau.

1965-1967 Ambassador Extraordinary and Plenipotentiary at Tokyo, concurrently in Korea.

In 1943 at Chungking (China), Dr. van Gulik married a Chinese, Miss Shih-fang *Shui* (Christian name Frances Shui)
In 1944 a son was born, *Willem Robert*
Pieter Anton (son), was born in1946.
Pauline Frances (daugter) was born in 1951.
and
Thomas Mathijs (son) in 1952. ［補注(1)］

［附録2］ヴァン・グーリック自編著作目録

Ⅰ. Publications during my middle-school days, 1923-1930

In 1926 I began to contribute essays and poets to the monthly ROSTRA, a magazine of Dutch Gymnasia. The essays were nostalgic sketches of my boyhood experiences in Indonesia, a series entitled "Van het Schoone Eiland" (Tales from the Beautiful Island), describing local festivals, trips to Chinatown, etc. The poetry was typically odolescent, pseudo-love and pseudo-philosophical, and partly in French; French because we had an excellent teacher for that language, who inspired us with his own enthusiasm.

In 1928 I began to contribute articles on China to the Dutch periodical "China", the magazine of the Dutch-Chinese Cultural Association.

Ⅰ—1 *Enige opmerkingen omtrent de Shih Ching, het Klassieke Boek der Oden* (Notes on the Shin Ching, the Classical Book of Odes), "China", vol. III no. 4 (1928). This is my first sinological publication.

Ⅰ—2 *Ku-shin-yuan*, (the Source of Old Poetry)

Ⅰ—3 *De Bloeitijd der Lyriek* (T'ang poetry) "China", vol. IV, nos. 3 and 4, 1929.

Ⅰ—4 *De Mathematische Conceptie bij de Oude Chinezen* (The Mathematical Conception of the ancient Chinese) Nederl. Tijdschrift voor Wiskunde Euclides, 1929.

Ⅰ—5 *Chineesche Wonderverhalen* (Chinese Tales of the Supernatural), in Tijdschrift voor Parapsychologie, vol. I (1929), pp. 158 and 280.

Ⅰ—6 *De Verwerkelijking van het Onwerkelijke in het Chineesche Schrift* (The realization of the unreal in Chinese calligraphy), "Eleseviers Geillustreerd Maandschrift, vol. 39, pp. 238 and 318. 1929.

Ⅰ—7 *Het gedicht van de Rode Muur* (The poem of the Red Wall -Ch'ih-pi-fu by the Sung scholar Su Tung-po) "China", vol. V (1930), no. 2.

Ⅰ—8 *Wang Lun* "China", vol. V, no. 4.

Ⅰ—9 *Chineesche Wonderverhalen* (continuation of the articles mentioned above) Tijdschrift voor Parapsychologie, vol. II (1930), p. 111.

Ⅰ—10 *An English-Blackfoot Vocabulary*, based on material from the Southern Peigans (as co-author of Prof. Dr. C.C. Uhlenbeck) Koninklijke Achademie van Wetenschappen, vol. XXIX, no. 4), Amsterdam 1930.

Ⅱ. Publications during my student-days, 1930-1935.

Ⅱ—1 *Oostersche Schimmen*, (Shadow-plays of the Orient), series of illustrated articles in "Elseviers Geillustreerd Maandschrift", parts I and II in vol. 41 (1931), pp. 94 and 153.

Ⅱ—2 De Wijsgeer Yang Tsjoe (The Philosopher Yang Chu) "China" vol. VI, no. 3, 1931; second part in "China" vol. VII (1932) no. 2.

Ⅱ—3 Urvaci, een Tooneelstuk van Kalidasa, one vol., publ. by Adi Poestaka Cy. The Hague 1932. Drama of Kalidasa, translated from the Sanskrit original with an introduction

and text-critical notes.

This was my first published book. The translation is correct-being made under the guidance of Prof. Uhlenbeck - but the Dutch style stilted, greatly influenced by my translations from Latin and Greek, I decorated the book with vignettes which I drew after old Indian paintings.

II—4 *Oostersche Schimmen*, E.G.M. vol. 42 (1932), pp. 230, 306 and 382; parts III and IV of the series mentioned above. The concluding part in vol. VIII (1933), no. 1.

In 1993 I contributed a number of articles and book-reviews to Dutch periodicals and newspapers on Chinese subjects which I can't trace any more. I also regularly contributed articles to the monthly of the Chinese Student Organization in Leyden, the *Chung Hua Hui Tsa Chih*; translations of Chinese poetry, on Chinese chess, on Chinese writing materials etc.

II—5 *A Blackfoot–English Vocabulary*, based on material from the Southern Peigans (as co-author of Prof. Dr. C.C. Uhlenbeck) Koninklijke Academie van Wetenschappen, vol. XXXIII, no. 2, Amsterdam 1934.

II—6 *Hayagriva, the Mantrayanic Aspect of Horse–cult in China and Japan*, with an introduction on horse-cult in India and Tibet. Published Leyden 1935 by E.J. Brill as doctoral thesis, and simultaneously as a separate volume of *Internationales Archiv für Ethnographie*.

In this period I also contributed the articles on China to the big Dutch encyclopedia *Winkler Prins Encyclopedie*, the fifth edition 1932-1938.

Ⅲ. Publications during my first Japanese period, 1935-1941.

III—1 *Mi Fu on Inkstones*, a translation of the Yen-Shih, with introduction and notes. Peking, Henry Vetch Cy. 1940.

I had chosen this subject in Leyden for sub-thesis for my MA in Oriental languages; after having studied additional sources in Japan and Peking, I arranged for the publication in bookform during one of my visits to Peking. The *Yen–shih* is a very technical text on ink-slabs by the famous Sung painter and scholar Mi Fu.

III—2 *Kuei–ku–Tzu, the Philosopher of the Ghost Vale*. In English, but published in the Dutch periodical "China", vol.XIII (1938). This article was the introduction to my complete translation of the work ascribed to the Father of Chinese Diplomacy (ca. 3d century BC), but the m.s. got lost during the Pacific War, and I never got round to re-writing it.

III—3 *The Lore of the Chinese Lute, an Essay in Ch'in Ideology*. Monumenta Nipponica Monographs, Sophia University, Tokyo 1940. The Monumenta Nipponica were founded in 1938, and I have been a member of the editorial board ever since. In Vol.VII (1951) I published an article "*The Lore of the Chinese Lute*" in the same periodical, embodying additional material on the Chinese Lute gathered during my stay in China during the Pacific War.

III—4 *Hsi K'ang and his Poetical Essay on the Lute*, Monumenta Nipponica Monographs, Tokyo 1941. A supplementary volume, at the same time a study of intellectual trends in China in the 4th century AD.

III—5 *Kakkaron, a Japanese Echo of the Opium War*, a long article contributed to vol. IV of the *Monumenta Serica*, the sinological periodical of the Catholic University of Peking. 1940. In guarded terms I compared i.a. the ultra-nationalism in Japan in the 19th century with that rampant in 1940.

III—6 *Dr. John C. Fergusen's 75th Anniversary*. A biographical article on the Nestor of Western sinologues in Peking, publ. Monumenta Serica Vol. VI 1941.

III—7 *On the Sealrepresenting the God of Literature on the titlepages of Chinese and Japanese popular editions*. Long illustrated article in Monumenta Nipponica, vol. IV no. 1, 1941.

III—8 *Shukai-hen*, a description of life in the Chinese Factory in Nagasaki during the Ch'ien-lung period, translated from the original Chinese into Japanese, with Japanese introduction and notes. Long illustrated article publ. in *Toa-ronso*, Tokyo 1941. Later also publ. separately.

Various book-reviews in Monumenta Serica and Monumenta Nipponica. ［補注(2)］

Ⅳ. Publications during my second Japanese period, 1948-1952.

IV—1 *Dee Goong An, Three Murder Cases solved by Judge Dee*, an old Chinese detective novel translated from the original Chinese with an introduction and notes, Tokyo 1949.

IV—2 *Ch'un-meng-so-yen*, a Ming erotic story, published on the basis of a manuscript preserved in Japan, with an introduction. Limited edition of 200 copies, Tokyo 1950.

IV—3 *Erotic Colour Prints of the Ming period*, Tokyo 1951, three volumes in one Chinese-style cover, edition limited to 50 copies. Vol. I (250 pages) is a detailed history of Chinese sexual life till the beginning of the Manchu period (1644), with special reference to Chinese erotic art, and illustrated with genuine blockprints, made by a Japanese engraver as exact copies of the Ming originals. The entire text is III X III III II mimeographed as written out by me, the title page hand-coloured. Vol. II contains all the original Chinese texts, also mimeographed in my own writing, vol III is a reprint of a Ming erotic album of 24 pages, struck off the original woodblocks in my collection.

IV—4 *Brief Note in the Cheng, the small Chinese Cither*, article in the Journal of the Society of Research in Asiatic Music (Japanese), no. 19, Tokyo 1951.

IV—5 *The Mango-trick in China*: an Essay on Taoist Magic. Article in Transactions of the Asiatic Society of Japan, 3d Series no. III Tokyo 1952.

IV—6 *Meiro-no-satsujin* THE CHINESE MAZE MURDERS, in a Japanese translation by my friend the Japanese Sinologue Prof. Ogaeri Yoshio. Publ. 1951 by the Kodansha Cy.

This is the first of my own Judge Dee novels published. In the winter of 1949 I had written "The Chinese Bell Murders" completed in March 1950. The Japanese publisher

did not like the unfavourable description of Buddhists, hence I then wrote my second novel, the Maze Murders.

V. Publications appeared 1952-1962.

1953

V—1 *Ti-jen-chich-ch'i-an*, one illustrated volume. Nan-yang Press, Singapore 1953. This is the Chinese translation made by me during my stay in New Delhi, of THE CHINESE MAZE MURDERS.

1955

V—2 *De Boek-illustratie in het Ming Tijdperk*, (The Book-illustration during the Ming Period), one illustrated volume written on the request of the Nederlandse Vereinging voor Druk-en Boekkunst (Netherlands Association for the Art of Printing), publ. in a limited ed. of 500 copies, The Hague 1955.

1956

V—3 *T'ang-yin-pi-shih, Parallel Cases from under the Peartree*, a 13th century manual of Jurisprudence and Detection, translated from the original Chinese with an introduction and notes. Sinica Leidensia edidit Institutum Sinologicum Lugduno-Batavum, vol, Leiden 1956.

V—4 *The Chinese Maze Murders*, One illustrated volume, Messrs. W. van Hoeve Ltd. The Hague 1956.

This was the first of my Judge Dee novels published in *English*. A Dutch version followed in the same year.

Since the publishing history of my Judge Dee novels can be easily traced, I do not mention the various editions in this record, but state in the text *when each story was written*.

V—5 *Siddham, an essay on the history of Sanskrit studies in China and Japan*, one illustrated volume, published by the International Academy of Indian Culture, Sarasvati-vihara Series, Nagpur 1956. Written in New Delhi 1953.

1958

V—6 *Scrapbook for Chinese Collecotrs: Shu-hua-shuo-ling*, translated with an introduction and notes. Imprimerie Catholique, Beirut 1958.

V—7 *Chinese Pictorial Art as viewed by the Connoisseur*, an essay on the means and methods of traditional Chinese connoisseurship, based upon a study of the art of mounting scrolls in China and Japan. One illustrated volume, publ. in Serie Orientale Roma, of the Italian Institute for Middle and Far Eastern Studies, Rome 1958.

Thus appeared, at last, wat I consider my *magnum opus* on Chinese pictorial art I had been working on since 1940.

1962

V—8 Sexual Life in Ancient China, a preliminary survey of Chinese sex and society from ca. 1500 BC till 1644 AD. One illustrated volume, E.J. Brill, Leyden 1962.

An enlarged version of my *Erotic Colour Prints*, stressing the broader sociological and historical background, The realistic prints have been omitted and erotic passages put in Latin, so that the book could be distributed without the rigid restrictions I felt it my duty to impose on the distribution of the Erotic Colour Prints.

Ⅵ.1967［補注(3)］

Ⅵ—1　"THE GIBBON IN CHINA" An Essay in Chinese Animal Lore.

A gramophone record of the musical calls of the gibbon is added in a poket attached to the end papers. "The Gibbon in China" was printed in Tokyo and will, in the near future, be posthumously published by Messrs. E.J. Brill at Leyden, The Netherlands.

Dr. R.H. van Gulik, died on September the 24th, 1967.

Ⅶ. Remarks on my Judge Dee novels

省　略［補注(4)］

Tokyo, December 1966.

Ⅷ. Note on the illustrations of the Judge Dee novels.

Tokyo, December 1966.

Ⅸ. THE JUDGE DEE NOVELS

Ⅹ. JUDGE DEE STRIP-STORIES

Ⅺ. OTHER THRILLERS

［補　注］

(1) この家族についての記述部分は別紙になっており、後人の付加と思われる。

(2) この「自編著作目録」では、1942年から1947年までの部分が存置されていない。原本では、それぞれの時期は一枚のシートの中に收められているので、缺落した可能性も考えられたが、Boston大學の圖書館の一つであるMugar Memorial libraryの"Robert van Gulik Collection"による*"Bibliography of Dr. R. H. van Gulik(D.Litt)"*と題されたタイプライターで打たれた册子（[Z8375.37 B5]、出版所不明、全82p、22cm、1969?）の末尾部分（pp64-81）にも、ほぼ同內容の*"Notes Written by Dr. R. H. van Gulik to Mr. H. B. Gotlieh, chief of Special Collection"*という著作目録が收錄されており、そこにもこの期間の記述はなく、從って後の缺落ではなく、理由は不明であるが、グーリックの執筆當初から存在しなかったのであろうと考えられる（當該册子は、Pennsylvania大學圖書館所藏本のコピーで確認した）。この期間の重要な編著としては、中國語で書かれた『明末義僧東皐禪師集刊』（商務印書館、1944年、重慶）がある。なお、Boston大學圖書館編纂の册子は、グーリックの書

誌において、後人の手が加わっていることで、早稲田大學圖書館に所藏される *"A personal history of Dr. Rorert Hans van Gulik(1919–1967)"* よりもよく整理され、また詳細であるが、これによって早稲田の殘されたものが原據とされていることも確認できる。

(3) この年の記述は、グーリックの逝去の日が記されているばかりでなく、體例も他と異なっているので、後人によって附加された部分と思われる。この項目を記すシートには、この數行の記述があるだけである。

(4) これ以下、14枚に書かれたⅦ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ・Ⅺの記述は、紙幅の都合で、紀年を除いて、すべて割愛した。